博士論文（要約）

中国黄海島嶼漁民の人類学
―歴史・相互行為・外部環境―

Society & History of the Chinese Yellow Sea Islands
―An anthropological approach to the islands―

東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻

緒方　宏海

本論の目的は、中国黄海に浮かぶ長山諸島の事例から、文化人類学の手法をもって、「周縁」とされてきた島嶼に生きる人々が、日常の生活世界でどのような相互行為の特徴を有し、「島嶼」と呼ばれる特徴の社会を形成し、また外部環境である国や陸地本土との関係のなかで、歴史を構築してきたのかを明らかにしようとするものである。本論と関連する先行研究には、第一群として、筆者が専門とする文化人類学のほかに、社会科学（人文地理学と社会学）における島嶼に生きる島民の島国根性といった心象性や文化アイデンティティ、島固有の島嶼性に関する研究がある。第二群には、地域研究として、中国の農村・漁村、島嶼社会における民族誌的研究がある。本論では、かような先行研究を踏まえて、島嶼性という概念で曖昧にされてきた島民の共同体の実態について、人類学的な手法と視点を用いて中国の最東端にある長山諸島を対象にして、過去 100 年の歴史から厚く民族誌として描き出すことで本論の課題を追究した。

本論では、序論で社会科学において現在提示されている島嶼社会論や島嶼性に関する議論について分類し整理した。従来の先行研究において議論されてきたのは、島嶼社会論の議論であり、その帰結するところは島嶼性をもって島民の普遍的な概念を目指すことであった。

また島嶼性は、島嶼の社会現象についてすべてを包括したという用語であり、漠然としている。従来の先行研究では、島嶼性には、島民の間でどのような社会関係が生成し、消滅し、あるいは変化していったのかについて注目してこなかった。島民の共同体的紐帯、集団的行動、島嶼に生きる人々の心理または島国根性に関する記述のみに留まっている。つまり、島嶼性は、島民等が構築する社会関係の総体、行動規範について曖昧にしてしまった結果、その「総体」を構成しているはずの、島民と島民の間の個別的な関わり、相互行為を退けるような用語となっている。

本論は、これまで人類学で未開拓であった島嶼性の議論に参加し、中国の黄海島嶼社会の実態から、島嶼性という用語の中で曖昧にされてきた島民の共同体的紐帯、集団的行動、島嶼に生きる人々の心理または島国根性について、島の歴史や社会変化に注目しながら、中国の長山諸島の民族誌的記述から浮き彫りにした。

序論第 3 節では、中国人の相互行為の特徴について、費孝通の「差序格局」、梁漱溟の「倫理関係」を検討した。これを手掛かりにしながら、本論は、第 1 章から第 3 章では、島嶼の歴史的経験と題し、島嶼に生きる人々がいかなる社会変動を経験してきたのか、その歴史過程を描写した。また同時に、島民は島嶼性の特色である隔絶性、環海性と常に向かい合いながら、生活を組みたててきたことを明らかにした。

第 1 章では、長山諸島の島民の移住・定住の過程について検討した。これに基づき初期の地域社会の形成特徴を関連させながら、人々が島嶼性の特徴である厳しい自然環境と戦いながら生産活動と暮らしを営んでいたこと、独自の社会生活の特徴を作り、陸地とは異なる地域事象を呈していたことを明らかにした。

島嶼である故に、無政府状況下で、島嶼内で成立した「実供」制度や集団治安組織である

「会」の組織があった。かような「実供」制度や集団治安組織である「会」の組織は、明らかに島嶼性に由来する地域社会の特徴であった。初期の移住には、宗族集団対個人による移民の経済層の分化、単姓村落の形成、山東省の地域文化の輸入、この三つが相互作用の結果として、島民の関係性の構築に影響し、長山諸島における地域社会の特色となっていた。

第 2 章では、日本が長山諸島を支配して以降、全体として行った関東州の漁業政策について明らかにした。植民地政府によって、動力船の導入やローカルな企業家の出現をもたらし、島で初めて産業としての漁業が確立する過程について概観した。その政策のなかで、中国人漁民は確かに植民地支配下で、漁業を発展させた。しかし長山諸島だけは、本土の中国人漁民とは異なる漁業生産システムがあり、島嶼性という要因から、島で成立した「実供」制度は、日本植民地行政側の統治以降も、富裕層が同制度を利用して貧しい島民を支配していた。

その背景には植民地行政の漁業政策の根幹に、日本本土への安定した魚類の供給という、本土重視の志向性があった。そのためには、漁民が安定して生産を行う環境が必要であり、「魚覇」など富裕層を利用することで、それが安定した統治につながるという植民地政府の明確な認識があった。

続く第 3 章では、中華人民共和国建国後、長山諸島の島民等がいかにして編入されていったのかをみた。中国共産党政府は、「魚覇」を打倒し、貧困層の負債を帳消しにした。島嶼性に起因する「実供」制度を解体させたことによって、島民を新しい国への編入と、島民の関係に平等性を確立した。かような社会変化によって、島民が中華人民共和国の国民であり、長山諸島の島民であり、集団の一員であるという、ナショナリズム、集団アイデンティティを醸成していった。島嶼性に起因する「実供」制度は、共産党によって解体されるとともに、三反運動、大躍進運動、四清運動、文化大革命というように次々と国によって展開された社会運動によって、島民の社会関係に新たに階級区分という差異化をもたらした。

第 4 章では島民の主要な生業である漁業の現場に見られる島民の相互行為に焦点を当てながら、彼らの相互行為の特徴を考察した。その手順として現在の島の婚姻形態と通婚圏、父系血縁集団である宗族の関係、分家、漁業の労働の現場における個人と家族の関係、隣人という順に紐解きながら、最終的に、島嶼社会における相互行為の特徴を見た。

第 4 章で明らかになったのは、長山諸島の場合、世代、性別、職業によって、相互行為の特徴には異なる傾向が見られたことである。中国人の相互行為の特徴を指摘した費孝通は、自己と最も親しい親族を第一に、親族の次に親疎関係の序列化を指摘していたが、長山諸島の事例からもわかるように、島民の親族関係には、血縁関係第一であるとは限らずに、利害対立を回避しながら、その親族関係を選択している。かような相互行為の特徴を帯びるようになったのは、急速な経済発展を遂げた島の社会状況と島民の家族意識の変化と大きく関係している。

各世帯内の漁業経営について注目すると、海上の作業は男性が、陸地の販売ルートや加工は女性がというように性別による分業が明確にされている。とりわけ漁業において、妻が販

売ルートの開拓など大きな役割を担っていた。また同時に、世帯内部で嫁の地位が大きく変化したことによって、人々の家族形態も拡大家族から核家族に変化しており、子育ても依存する必要がないために、世帯として独立した生活をしている。ある意味、女性が陸地で漁業に関する作業を主導的に行っていくことで、男性は安心して漁獲や養殖を行い、それが結果として生産性の向上にも結びついている。この変化は、かつての計画経済期では、予想もし得なかった漁業の労働現場における女性の躍進である。

第 5 章では、村民委員会選挙と島の政治的現場に現われるその相互行為秩序を明らかにした。村民委員会の選挙と政治生活の場に埋め込まれた島の独自の政治的な境界性について提示した。

第 5 章の事例分析で明らかになったのは、現場の村組織を主導する村幹部が今日直面しているのは、自己の利益の最大化よりも、村民と地方政府の両者の狭間でどちらかを選ばないといけないという利益対立の構図のなかでガバナンスのジレンマを抱えていることであった。村の政治空間において、村幹部のたゆまざる努力によって、村民との信頼を築きかつ「信頼」という人格を保障にした社会関係の網を村で張り巡らしているかが重要なのである。

本論の結論として言えば、島嶼性を以て、長山諸島の島民の共同体的紐帯を説明すると、島を閉じられた世界として看做してきた前近代的な共同体論に陥りやすい。島嶼性と島民の性別や世代ごと相互行為の特徴を見ると、その関係性の部分には大きなズレがある。だがその一方で、長山諸島の島民の相互行為として共同性への志向や動きは、次のような特徴がある。長山諸島の場合、生活に密着した場面で、何らかの利害や問題が発生し、そこに強烈な関心が向けられるような事態が発生した場合、島嶼性の特徴として説明できる島民の相互行為が見られる。例えば外部企業と島の若者の喧嘩である。また筆者が、長山諸島へフィールドワークに初めて出かけた 2004 年 8 月の時に、フェリーの船長が語っていた島民にはハッキリ見えるかたちで、「島上人心齊」（島の人々は、心は一つである）というのも一つの事例である。つまり島では何らかの切実な問題（社会的な困窮や差別）に直面したり、島の外部環境による何らかの影響を受けたり、島民が激しく動揺した時に、島民等の集団行動が前面に出てきてくるのである。だが日常では、その相互行為の特徴は、同じ島嶼内においても、性別や世代など個人がそのつど直面する問題や関心によって変化したり、再編成されたりするのである。つまり日常では、性別や世代などによって個人の相互行為の特徴は生活様式や利害、問題、関心が異なっており、また状況依存的である。

従って、島嶼性または「差序格局」を以て、その本質的性格を捉えにくいのである。これ故に、本論が手がかりとしたのは、ミクロレベルの生活の場で行われる相互行為であり、際立ってくる場面であった。それでも、複数の島民の間に持続的な相互行為とその蓄積があったことによって、島民が一体としてつなぐときに、重層的な社会結合関係があり、そこには伸縮する共同性への帰属意識がある。